

増井 萌  
MASUI Moe



## 3angleの鏡にうつる1self

樟、油彩



自分よりも周りの人間の方が、ありのままの自分を知っているのではないか

私の作品は、鑑賞の対象というよりも、何かを疑似体験できる装置のようなものでありたい。

そのように考えたのは、舞台鑑賞に魅了されたことがきっかけだった。人間が目の前でお芝居をしている姿や臨場感に心を奪われ、作品と鑑賞者の関係は、鑑賞することではなく、疑似体験と捉えるようになった。そこから、自分が制作する作品も人間の存在感や臨場感が感じられるようなものにしたいと考え、人間とものを融合させ形にする、という手段をとっている。融合させたものや方法によって作品のテーマは変化する。

本作、「3angle の鏡にうつる 1self」は、三面鏡と3人の人間が融合した形の彫刻作品である。テーマは”客観視”。

三面鏡は、自分の正面の姿だけでなく、様々な角度の姿が確認できるものであるが、本作は3人の人物の視点を映し出す鏡である。つまり、”客観視装置”のようなもの。鑑賞者は、自分が三面鏡にどのように映し出されているかを想像し、自分を客観視することを疑似体験できる。

私にとって客観視は、生きていく上で必要不可欠なことであると考えます。

自分を客観視するという事は、自分のことを利害や感情を除いた観点で、周りからどう感じられているのかを把握することである。時には感情的になり自分を見失うことがあっても、それを行うことで冷静さを取り戻すことができる。よって、客観視は周りから見た自分と向き合うことにおいて重要な事であると考えます。

自分よりも周りの人間の方が、ありのままの自分を知っているのではないか。セルフイメージは、もしかするとただの思い込みにすぎない。多角的な視点を受け入れることが、本当の自分を認識できる手段なのである。私の作品も、自分から一方的にメッセージを提示するものではなく、”疑似体験“という、鑑賞者の実感があることで確立する。客観視と彫刻、どちらも”自”と”他”という切っても切り離せない関係で成り立っている。